

〔翻 訳〕

将軍の領土に乗り込んだアメリカインディアン(1)

——フレデリック ショット 著 (序章及びP.157~168)——

中 川 操

序 章

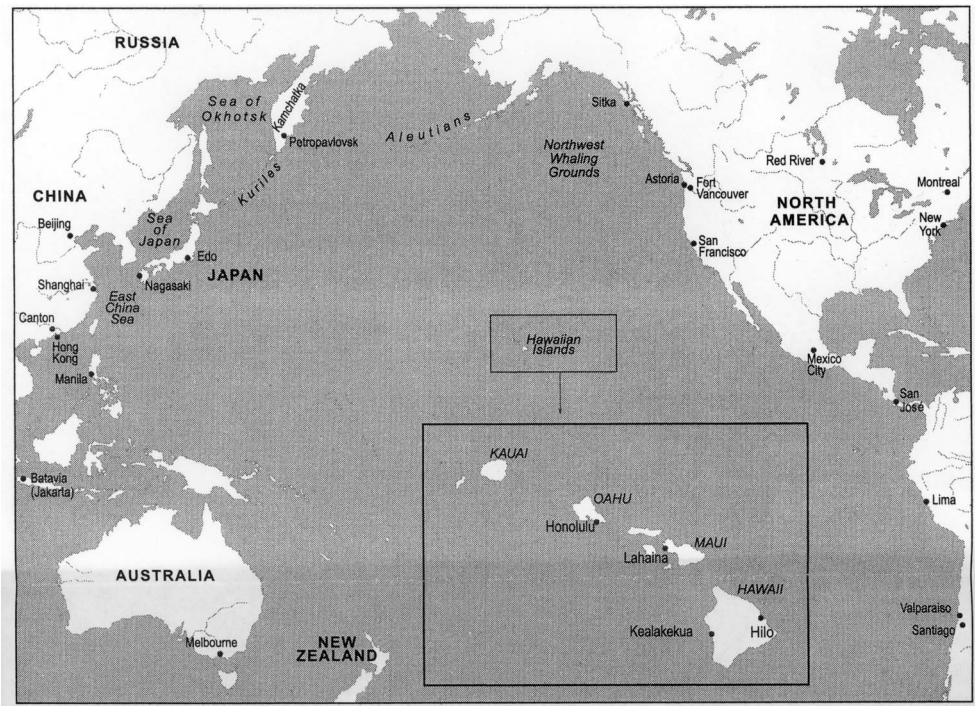
これはとんでもないことを目論んで歴史の亀裂に落ち込んだ一人の男の話である。男の名はラナルド マクドナルド、父親はスコットランド人と母はチヌークインディアンの酋長の娘で、コロンビア川の河口に産まれた。1848年、24歳の時に、封建時代の日本に無謀にも入国を試みた。当時の日本は、外国人との接触を厳格に禁じていた。どのように、この男は冒険を実行したか、その無謀な冒険が、歴史にどのような意味をもたらしたかが、この本の主題である。

最初にマクドナルドのことを知ったのは、1990年頃であった。“America and the Four Japans: Friend, Foe, Model, Mirror”¹⁾ という題名の私の最近の著書の中で、マクドナルドについて述べるために調べていた時である。その著書の中で、私はごく簡単に、マクドナルドについて触れただけであったが、その後、地方の図書館で、彼の自筆の「自叙伝」と目される埃をかぶった書籍に出会った。それは、ウィリアム ルイスと村上 直二郎編集、イースタン ワシントン州立歴史協会発行の Ranald MacDonald, edited by William S. Lewis and Naojiro Murakami 1923年発行の著書の原稿であった。

私は成年になってからのほとんどを、日本で過ごしたにもかかわらず、こんな興味深い北米人がたった一人で、自分だけの意志でアメリカから日本に渡ったことをいままで知らなかったの、この原稿を見た時はまったく驚いた。ところが、この人物を知らなかったのは私一人ではなかった。多くの人々が、日本歴史通という人たちも含めて、マクドナルドという人物をまったく知らなかった。私は秘密の、取り残され、忘れられた歴史に偶然出くわしたと感じた。

私が今まで書いてきた著書は、いずれもある意味で、個人的なオディッセー（放浪記）のようなものだったが、今度の著書は、その中でも一番長いもので、着想から完成まで、約12年かかった。書いている間は、一種の執念の鬼のようになって、主人公マクドナルドが生活した場所、訪れたところへ私も行ってきた。つまり、北米、カナダ、日本の、特定の場所へ行ってきた。また古文書館、図書館で、古い書物や新聞を読み漁り、埃をかぶった

1) 著者 フレデリック ショット氏については「大阪大論集 第52巻第6号（2003年3月）（p. 14～p. 16）」で、“America and the Four Japan”の著者とともに、マクドナルドについての記述を紹介した。



The Pacific Ocean and the Hawaiian Islands.

昔の記録類や、何巻もの傷んだマイクロフィルムを、眼をこすり、血走らせながら、じっくり見たり、数多くの人から話を聞き、手紙を交換した。

このような中で、私と同じようなことをしている人が、かなり多くいることを知った。このような人々は、私と同じように、偶然にマクドナルドの存在を知り、自分の心の琴線がマクドナルドの心の線と共感していることを自覚した人々であった。この人たちの中の一部は、マクドナルドの記憶をいつまでも忘れないように、日米両国で、「マクドナルド友の会」“Friends of MacDonald”²⁾ という小さな会を作った。更に、私は調べている間に、次ぎのようなこと——マクドナルドの一生には、確かに多くの謎があるけれども、それでも尚、1824年に生まれ、一生どの団体にも所属してしていなかった人物にしては、マクドナルドに関しての英語、日本語、オランダ語で書かれたかなり豊かな資料が、文書に整理されて、良く残っていることに気付いた。その上、マクドナルドの死後、英語や日本語で書かれたかなりの量の論文や書物が残っていることに気が付いた。このような資料、著書がたくさん残っているにもかかわらず、尚、マクドナルドという人物は正統的な歴史の中では、極めて余白の中の人物にとどまっている。

2) “Friends of MacDonald”の本部はアメリカ・オレゴン州・アストリアの Clatsop County Historical Society にあり、「歴史、教育、人と人の交流に関心のあるアメリカ人と日本人の絆を強めることを志す人々の集りです。記者も会員

ここに問題がある。なぜ、いつも興味をもたれるとはかぎらない人物に関する本を、今更、あらたに書いたりするのか。「マクドナルドという人物のことを、人々はもっと知らなければならぬから」というのが私の簡単に自分流の答えであるが、もっとカッコ良く答えるならば、「マクドナルドの新しい資料が続々とでてくる現在、それらを利用して、彼の生涯と冒険を、今までより広い視野のなかに置いて、新しく見ることができることが可能だからである。」

読者の皆さまは気付いておられると思うが、ラナルド マクドナルドの物語は極めてこんがらがった事実を、虚構と勝手な思いつきから丁寧に仕分ける作業が必要である。この作業をして、はじめて、マクドナルドの冒険を、もっと大きな構図の中に置くことが可能である。多くの記録された歴史の書物は、無限に複雑な過去を構築しなおす作業といえる。それらの歴史書は入手可能な限りの資料を集め、その上で、われわれの理解力や必要性の変化に応じて、基本的には変化していくものである。われわれは、マクドナルドの生涯を再検討することにより、日米国際関係の初期の段階に新しい光を与え、更に、広く19世紀の世界の新しい見方をすることが可能になる。

ハワイ諸島での「地固め」

19世紀の中ごろ、ニューイングランドのサッグ港（Sag）からハワイ諸島への航行のために建造された捕鯨船「プリマス号」に乗り込み、マクドナルドはハワイ諸島に到着した。当時の捕鯨船としては、ごく普通の5ヶ月半を費やして、プリマス号は1846年5月17日にマウイ島のラハイナ港に着岸したと記録は報じている。南半球の夏の間に、天候の不安定なホーン岬を無事通過し、南米の西側沿いに北上し、ハワイ諸島のマウイのラハイナ港に到着した。したがって、プリマス号はクジラの油、骨といった積み荷なしのカラツツボの状態、ラハイナ港に到着した。ラハイナ港での船舶は、プリマス号だけではなく、他のアメリカの捕鯨船も多数停泊していた。その年、1846年には429艘の船舶がラハイナ港にドック入りしていたが、ほとんどは、アメリカ合衆国の東海岸からの船舶で、その上、ほとんどの船舶は、日本近海へすでに航海し、日本近海の捕鯨海域から鯨油やクジラの骨を積んで帰ってきた船舶であった。

* * *

1846年のハワイ諸島はまだ独立王国で、キャプテン クックがハワイ諸島を発見したのはその68年前であった。カメハメハ一世とその子孫たちは、外国からの訪問客、ヨーロッパの技術や助言を歓迎し、また、外国の風習を学ぶために、若いハワイ人を外国に留学させたり、アメリカの捕鯨船に乗務員として乗船させた。しかしながら、この門戸開放政策は意図しない悲劇的な結果をもたらした。このようなことは、世界中の原住民によく起こったことだが、新しい考え方が、古い伝統的な信念を弱める結果をもたらしたり、今までなかった新しい病気が入ってきて、急速な人口減をもたらすという事態を生じた。イギリス、フランスは、争ってハワイ王国を支配するためにずるい手段にでた。しかし、1840年

代までに、ハワイ王国は、アメリカの商人やキリスト教の宣教師たちが、政治上の最高地位の顧問官や政府役人として入り込んでいて、すでに権力を握っていた。

ハワイ諸島が発見された直後から、アメリカのハワイ島の政治への干渉が始まっていた。アメリカ東部海岸の港から、太平洋西海岸の港、更に中国の港までの航海を終え、帰港する長旅の中継の港として、ハワイの港は絶好の中継地点であった。特にラッコがほとんど絶滅状態になった後、ハワイの白檀の木が中国では貴重な商品として売れることがわかって、アメリカ商船の交易の貴重な積み荷となった。ハワイでの白檀の資源がとぼしくなった時、今度は太平洋が捕鯨に絶好の漁場であることが発見されると、太平洋の島々は太平洋に群がる捕鯨船からの収入を当てにするようになった。それは、捕鯨船は他の商船や軍艦よりも、はるかに長く太平洋にとどまっているので、太平洋の島々は、船舶にとっては、食料の補給や修理のため、船乗りたちにとっては、休息をとり、体力を回復するため、船長たちにとっては、乗船を拒絶したり、航海中に死亡した船員を新しく雇い入れるための重要な場所となった。

このように、ハワイ諸島は、太平洋のど真ん中の通商交易、交通の拠点としての必要な機能を獲得するに至った。そして、時を同じくして、日本に関する情報がどっと入ってきた。北太平洋と日本近海への初期の探検家のほとんどは、日本諸島によって妨げられてしまっていた。フランス、イギリス、デンマーク、ロシア、更にアメリカ合衆国の民間船や、軍艦が、定期的に中国のジャンクが停泊していた広東や、オランダ船が長崎から帰国途中に停泊していたバタビア（現在のインドネシアのジャカルタ）にやって来ていた。日本の北の海域で鯨を獲っていた捕鯨船からも、日本関係の情報がもたらされた。1840年代にはハワイ報告は、日本に関する直接的で、公の情報は持っていなかった。日本が、まだ、鎖国政策をとっていたので、日本に関する情報は乏しかった。1840年代のほとんどのアメリカ本土住民の眼には、マクドナルドの死を恐れない日本侵入の行為は、狂人的な無謀なものと映ただろう。しかしマクドナルド自身の冒険への理論づけとその冒険を、はっきりした形にして実行しようという力が、ハワイで、はっきりと形造られていった。

冒険の準備

マクドナルドの死後に出版された「物語」の本の中には、マクドナルドが乗船してハワイにやってきて、プリマス号に乗り込んで、日本に到着する前に、ハワイ諸島でかなりの時をすごした「タスカニー号」については述べていない。「物語」の中で、マクドナルドは、ただ次ぎのように記しているだけである。「私の幼年時代、ハドソン湾会社はハワイ諸島と親密な取引関係を持っていたので、ハワイは私にとって、特別に興味のある土地だった」また、あいまいな表現であるが、自分の子どもの頃の知人の有名な植物学者のディビッド・ダグラスが、雄牛に突かれて、1834年にハワイで死亡したと付け加えている。ただの付け足しのような言い方で、「ハワイは、いつも、自分が日本と接触するときの私の心構えの客観的な場所であった」とそれとなくおわせている。

ハワイで、マクドナルドは、自分は「日本の北の海に向かう捕鯨船を探した」と話して

いる。マウイ島のラハイナで、仲間と数日間過ごした後、偶然に、修理のためにカラカウア湾に入ってきたプリマス号の老船長のもとに駆け込んだ。ここで、マクドナルドは、船長に、「目的の捕鯨の量に達するまでは捕鯨の仕事を手伝うが、給料の代わりに、捕鯨の量が目的に達したら、日本の近くで、私の望む場所で、望む時に、私を船から降ろすという約束で雇ってくれ」という約束を取り付けて、捕鯨船プリマス号に乗り込んだ。マクドナルドは、老船長に、ハードレイの象眼儀と、航海歴を使つての船の操縦方法を教えてもらおう取引した。老船長は不承知であったが、マクドナルドがそんな無謀なことを実行するはずがないと思ったので、しぶしぶ了承した。

マクドナルドの「手記」の中では、プリマス号がハワイ諸島に着いた時に、マクドナルドは船を離れ、後に、もう一度乗り込む手続きをしたように書かれているが、仲間たちと数日間過ごした後、再乗船を申し出るというのは考えられないことなので、これは大きな誤りである。当時のハワイの新聞は、プリマス号は、1846年5月17日にラハイナ港に到着したと報じている。そして翌年、1847年11月11日まで、日本海へ向かつては出航していない。その間、プリマス号は太平洋や北西方面に捕鯨にでかけていて、時々ハワイに寄港していた。その間、この船にマクドナルドが乗船していたかどうか。1848年の12月1日付けのホノルルの「ザ・フレンド」紙によると、マクドナルドは、その間、プリマス号に乗っていたと報じている。この新聞の編集員は、マクドナルドの同僚に会って、マクドナルドが乗り組んでいたことを確認している。マクドナルドの同僚たちの話では、マクドナルドは、2年間ぐらい、プリマス号に乗り込んでいたが、その後、1847年秋に、プリマス号のエドワード船長に次ぎの捕鯨シーズンの時にマクドナルドは自分を日本海岸のどこかで下船させてくれないならば自分を解雇してほしい、とラハイナで願い出ていたということである。

このことから、次ぎの二つのことが明らかである。1845年から1848年まで、マクドナルドはプリマス号に乗り組んでいたこと、かなりの期間、ハワイ諸島で過ごしていた、という2点である。地元の新聞の記録によると、かなり不完全な記述ではあるが、1846年から1847年にかけて、プリマス号は、マウイ島のラハイナ港だけでなく、ハワイ島のヒロにも停泊していた、と報じている。

マクドナルドは特に記述していないが、後の冒険の準備をしながら、必要と思われる情報や書物、それに操縦用具の入手などの準備に励んで、かなりな時をハワイで過ごしたと思われる。彼の冒険が、到底一晩で計画されたものとは思われない。マクドナルドの生涯の最後近くにかかれたと思われる手紙の中で「エドワード船長と取引をした時から、永年自分はこのことを暖めてきたが、かなり具体的な企画に入り込んだ、と信じた」と書いている。ハワイの「フレンド紙」の1848年の記事によれば、マクドナルドの計画に感銘を受けた編集者は、マクドナルドが、かなりな量の日本に関する資料を、すでに集めていたと報じている。

ラハイナ・太平洋の捕鯨基地

マクドナルドが滞在したハワイの港の中でも、ラハイナ港は最も大きな港であった。この港こそ、プリマス号が日本の捕鯨地に向かった港であり、マクドナルドが自分が訪れた港、と特記した港であった。ラハイナは、今では、静かなリゾート地になっている。絵のように美しいヨットハーバー、押し寄せる観光客に風変わりなビーチウェアを売っている多くの土産物店や、美しい浜辺が点在するだけの観光の港町になっているが、基本的には、1846年当時とは変わっていない。勿論、1848年当時は、店は今と違って、大抵は草葺きの小屋であったこと、それらの店は、当時は、水夫たちに酒や女を売っていたという点が違っていた。

カメハメハ王3世がホノルルに支配の場所を移した1843年までは、ラハイナがハワイ王国の首都であり、王宮もラハイナに存在していたのである。マクドナルドがプリマス号に乗り込んで、ラハイナに着いた1846年には、政治支配の座はホノルルに譲っていたものの、主として、捕鯨業のおかげで、依然としてまだ経済力の座を握っていた。ラハイナの港には捕鯨船のマストが林立していたし、常に100艘ほどの捕鯨船が北太平洋の冬の嵐が静まるのを待っていたのである。1年間に1万人もの船乗りが、世界からラハイナの港にやってくるのも珍しくなかった。時には、一度に800人もの船乗りが、この港町をあちこち歩き回る姿も珍しくなかった。

このような多くの訪問者が、ラハイナにやって来ていたにもかかわらず、1846年の国勢調査によると、この町には、犬523匹と3557人の人間が住んでいて、その中で、112人が外国人ということになっている。その数には、病院入院中の船乗りや、外交官の使用人を含まない。882軒の草ぶきの家、155軒のアドビー煉瓦造りの家、59軒の石造り、または木造の家があった。店のほとんどは、アメリカ人やヨーロッパ人によって経営されていた。その他に、一人のマホメット教徒と、一人のアチョウという中国人がいた。

* * *

今日、ラハイナの中心街の歴史探索のコースでは、1840年代の3ブロックの石造りの建物を通る。これらの建物は、ラハイナの歴史の大部分を物語っている。そして、ラハイナが、日本に関する情報の間接的な手形交換所になっていたかを物語っている。

ラハイナの町の中心にある第1の建物は、昔は砦であった。コーラルストーンを積み重ねて造られた分厚い石の塀で、1831年の建造で、当時、船乗りたち（船乗りを支える商人たちも含む）と、キリスト教宣教師と結託していた権力者との争いや、ごたごたを防ぐ壁として役立った。

船乗りたちにとっては、ハワイは一種の楽園であった。「ホーン岬の西には神は存在せず」というスローガンのもとに、船乗りたちは、ハワイでの陸の時間を楽しんだ。何ヶ月も船の中に窮屈に押し込まれていたのも、船乗りたちは、久しぶりにラハイナに上陸すると、女を抱いて、酒を飲んで暴れ回り、馬を借りて、酔っぱらったままで乗って、町を

走り回り、あまり酔っていて、まともに馬の背にまたがれなかったりした。当時、酔っ払いの天国として、この港町は有名になった。喧嘩は日常茶飯事であった。当時の英国人旅行者によると、「ハワイは太平洋の天国」どころか、「太平洋の女部屋」い名付けた方がふさわしかったということである。

この砦は1820年代に、部分的には、地元の若いハワイ人女性が捕鯨船に乗り込んで身体を売る風習をやめさせるためにアメリカ人宣教師たちが造った石垣であった。石垣は、捕鯨船の船長や、船乗りの怒りをかりたてた。1825年に、このことに腹を立てた捕鯨船の船乗りの一人が、地元に住んでいるアメリカ人宣教師の家族を襲い、宣教師の家族が身の危険にさらされた。この出来事の2年後、別の船乗りが、この宣教師の家に船上から砲弾を打ち込むという事件が起こった。

1846年までには、宣教師たちの後押しを受け、地元の権力者たちによって一応収拾することができた。砦は、大抵はシンボルとしての役割をはたしていたが、この時から、脱出者や、酔っぱらった船乗りたちの収容所として利用されるようになった。1844年に、21艘の船長たちが当局に、次のような皮肉の文書を提出した。「こんなことでは、たくさんの酔っ払いが引き起こす騒動をしずめようとしている警官の棒や石の被害に合わずに、何の害もない町の人たちが町を歩くこともできないではないか。しかも、そんな酒場はお前たちが「認可済み酒場」とした酒場ではないか」

マクドナルドは収容所の印象については、何も述べていないが、仲間の船員たちは、記録を残している。ジョサム ニューマンというウンカス号の若い船乗りである。(ウンカス号はプリマス号と同じ航路を共にしたベッドフォードの捕鯨船で、後に、マクドナルドが冒険をした時に、ちょっとした役割を演じた) ウンカス号の乗組員ジョサム ニューマンは1847年～1848年頃、砦の収容所を訪問している。ニューマンは、「ハワイ王国の閣僚は、ほとんどがアメリカ人だった」と述べて、次のように書いている。「殺人者の収容所でも、もっとましな収容所が造られてもよいと思われる。これではあまりに恥ずかしい。立法者たちが異教徒たちだったので、異教徒的な法律が期待されるのなら仕方がないが、文明化された国で育ったと自覚している人々の間に、このような野蛮なやり方が見られるのは奇妙であり、矛盾している、といわねばならない」

権力者たちと結びついたこの地の宣教師たちにとっては、ラハイナは一種の天国のような場所だった。この土地の土着民たちは、容易に、キリスト教に改宗させられたし、「文明化された」世界に、容易に適応されたからである。墮落した船乗りたちを、もう一度、信仰生活にたち戻させることができた。船乗りたちは、船上での孤独で、単調な生活がほとんどという仕事の性質上、世界観を変えることが容易であった。19世紀の中ごろには、1000人以上の水夫が毎年捕鯨業で命を失った、といわれている。ニューマンは長い単調な航海という記述の最後に「どの船乗りも、嵐や捕鯨の危険な仕事を生き延び、たえず、もうこれで自分の命も終わりか、と覚悟しながら、生き延びた奇跡を得た幸運」と書いている。

船長の仕事に加え、ニューマンは病気の船乗りを病院に訪ね、病院での宗教的儀式にも

参加した。船長は、「病院の行き届いた介護はあったものの、船乗りたちにとっては家族や故郷から、遠く離れて病に伏している非運、その上、この病院の入院患者のほとんどは、若い盛りの男性である。ここでは、死の使者が、病人たちを、死の世界に積極的に送りだしていくところである」と述べている。

マクドナルドが、航海中にけがをしたり、病気になった記録はないが、同僚の船乗りたちは多数怪我をしたり、病気にかかった。1846年の春は、プリマス号の船員の多数が病に倒れ、漁もできないくらい弱っていたので、船の積み荷が空のまま、港に入ったと当時の新聞は報じている。15人の乗組員（全乗務員の約半数）が航海中にチブスにかかり、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロに着く前に2名死亡、3人目もその後まもなく息をひきとった。エドワード船長は、本国から積んできたタマネギとじゃがいもにその原因があるとして、すべてを海の中に投げ捨てた。1846年に、ラハイナに着いて時は、全員元気を回復して、無事北太平洋に捕鯨に出発した。11月23日に1000樽の鯨油を積んで、しばらくハワイに戻ってきたと報じている。6月18日に最後の鯨を捕獲するときに若いキャビンボーイのチャールズ アイザックとアゾーレス島出身のマヌエル ルイスの2人が海に溺れて死亡、また、7月31日にも、ロングアイランド出身のダニエル リーブスが海で行方不明になったと報じている。

今日のラハイナの港からは、少し歩くと町の活気のある場所へ行ける。そこに、1835年に着任した有名な宣教師で、医師のドワイト ボールドウィン医学博士の復元された家がある³⁾。サンゴ礁の厚い壁と石、木の壁に囲まれたラハイナで一番古い建造物である。誰も見過ごして通ることができない。1840年代にボールドウィン博士は、町の医者として、郵便局長として、また、長旅に疲れた旅人や、船長たちや、外交使節たちの話を聞いた。ボールドウィン博士は、のちに「誰が、このボードウインの家の食卓でお世話になったか、泊めてもらったか、を何十人というニューベッドフォードやナンタケットやノース ロンドン、サッグ港の船長たちの口から聞けるだろう。」と書いている。

現代の作家たちは、ラハイナのキリスト教宣教師たちを、レッドリバーの宣教師たちとおなじように、キリスト教の聖なる伝道者か、土着の文化を破壊する手先か、上品ぶった叱責と考えがちである。しかし、確立した郵便局制度のサービスがまだなかった当時は、ボールドウィン博士やボールドウィン夫人のような人は、大変信じやすい人々の多い地域では、情報と知識の提供者、推進者としての役割を果たしていた。しばらくの間、ボールドウィン博士は船乗りたちの牧師の一人として、また人々の魂を救うとともに、人々の心の教育に関心を持っていた。19世紀の中ごろは、ニューヨークに本拠地のあるアメリカ船員友好協会が主導する伝動布教活動が盛んであった。船乗りたちは、陸に上がった時は、酒と女に溺れ、海の上では、上級船員にむち打たれ、さんざんひどい仕打ちをうけ、奴隷について最も踏みつけられた連中、と世間ではみなされていた。それ故に、捕鯨業に携わっている船員たちの教化にかかわりのあった宣教師たちは、こんな船員を窮地から救うた

3) The Baldwin Home に関しては2004年の中川の調査資料を紹介予定。

めに尽くしただけでなく、船員たちに読書による教育の場所を与えた。ボードウインハウスの隣に、船の士官と平船員のための読書室があって、書籍や新聞のいが置かれ、望ましいことだが、聖書や宗教論文などを読むことが出来た。

捕鯨業のための航海というのは、時々恐ろしい危険にさらされる。普段は単調な長い航海の生活であったので、多くの船乗りたちは飢えたように、退屈な時間を過ごすための書物類を求めた。アメリカ船員友好協会は、ボードウイン博士宅に船員用のチャペルが完成すると、すぐに箱一杯の書籍を送った。間もなく、ボードウイン博士から協会に返事が届いた。「もう50冊の賛美歌集を送ってください。それと50冊の英語の単語の綴りを覚える本が、すでになくなりました。船に乗っている船員たちの多くが、字が書けないからです。この船員たちや、水夫のための読書室にあった400冊もの本は、今、世界中のあちこちの海岸や船の中で読まれています。だから、毎年、本の詰まった箱を、ここへ送ってくださるよう希望します。宗教書や論文も、ここでは、がつつと読まれています。特に新しい新聞類は、読書室には必要欠くべからざるものです」また、別の手紙では、壁に貼るための世界地図を求めている。また、禁酒運動の一環として協会が作った「水夫たちのための雑誌」を何冊か求めている。伝導活動に加えて、その雑誌は、日本に関する記事を、また、1850年にはマクドナルド自身の冒険談のニュースも報じている。

旅行の探検談を扱った書物は、水夫たちには特に人気があった。ラハイナの水夫のための読書室は、初期の北太平洋の探検家たちの何冊かの本が置かれていたので、その本が、ハワイや、日本情報を提供してくれたと考えられる。ホノルルで刊行されていた「ポリネシアン誌」は、読者の質問に答えて、1848年7月13日付けの記事で「ハワイ諸島に関連があるか関係している、当時この地で人気のあった本のリスト」を特集記事として扱っている。そのリストによると、イギリスの探検家 W.R. ブロートニー、ドイツの探検家 G.H. フォン ラングスドルフとロシアの I.F. クルツエンシュテルン大尉の本などに、すべて英語訳があり、日本のことをかなり詳しく扱った本を紹介している。特に、マクドナルドの冒険にとって印象的なものは、これらの本は、当時、殆ど知られていなかった日本の国の地方に詳しいことで、後になって、マクドナルドが上陸することになった北の島々のことに詳しくあったことである。

しかし、書籍よりも日本のいろいろの情報に詳しくあったのは、ハワイの地元の新聞記事であった。1840年代には3種類の英字新聞がオアフ島のホノルルで印刷されていて、マウイ島のラハイナでも手に入った。そのうちの2紙——The Friend と The Polynesian は度々、日本の記事を掲載していた。そして、The Polynesian 紙の記事は、他ならぬ、ドワイト・ボードウイン博士が執筆していた。彼は、実に、最初のアメリカ人のジャパノロジストと考えられる。博士は、19世紀半ばに盛んであったプロテスタントの宣教運動家だっただけでなく、当時神秘的な国だった太平洋のかなたの国、日本に関して強い興味を持っていたのである。

地政学的な視点の移動

1840年代には、世界は大きな変化を受けつつあった。これは、「技術」や世界政治の変化の力によって、動かされていたからであった。ハワイは、ヨーロッパから、アメリカから、その上、アジアからでさえ、遠く離れていても、北太平洋で捕鯨業に携わっている船長や、乗組員たちの運命にも、直接影響を及ぼしていたので、ハワイの諸新聞は世界的な政治的变化を、特に、忠実に、読者に伝えていたのである。

太平洋のハワイの西方、南アジア、南東アジアでは、ヨーロッパ人は以前から長らく商業活動をしていたし、植民地を造っていた。しかし、支那は独立のままでいた。日本と同じように、支那は広東の港以外では、外国との貿易を統制していた。1839年には、英国は支那の中央政府の弱みにつけ込んで、支那政府がアヘンを英国から買うことを拒絶したことを口実に、いわゆるアヘン戦争を始めた。この戦争の結末は、1842年に広東以外に、もう4つの港と香港を、英国に利用させるという結果となった。

マクドナルドが冒険に乗り出した時は、鎖国の日本は、ヨーロッパの強国に犯されていなかったもので、ヨーロッパの諸国が近づくことのできない最後の国であった。結果としては、日本に関する情報は、あまりにも少なく、1853年3月になっても、アメリカの有力な雑誌がマルコ・ポーロの時代の架空の話を、当時の日本の現状だと混同して「日本の主な産物は純金で、宮殿の屋根や部屋の天井は、純金でできている。‘Nippon’（この文書のコトバでは）は国全体が巨大な金の鉱山である」と書いている。日本は、いつかは、より広範囲な貿易を行うために、港を開けざるを得ないだろう。強力で、強引な海軍を持つ英国が、多分日本の港を強引に開ける国の一つとなる、とハワイの人々は考えていた。しかし、当時の英国はインドの統治と支那の割譲に手が一杯だった。そして太平洋での力のバランスが変化しはじめていた。

この変化は、1846年に、米国の支配地図を大きく書き直すことで加速した。ラナルドマクドナルド生誕の地——現在のアメリカ合衆国北西部全体——は、英国と米国とで協同支配していたが、1846年に、国境が最終的に、49度線に決められ、米国の単独支配になった。また、同じ年に、アメリカ合衆国とメキシコの間で戦争が始まった。南西部全部と、カリフォルニアは、間もなくアメリカ合衆国の手の中に落ちて、はじめて、真の太平洋の強国としての地歩をかためることになることは確実なことであった。ここで、アメリカ合衆国と日本が対決しあうだけでなく、2万2千マイルから、わずか6千マイルに日米の距離が縮まったのである。当然、ハワイ諸島の新聞の記事は、アメリカとメキシコの戦争のことでいっぱいだった。

1840年代までは、高い地位にある少数のアメリカ人しか、太平洋や日本に興味を持っていなかった。1817年から1825年まで、米国大統領秘書として仕え、1825年から1829年まで、米国大統領になったジョン・クインシー・アダムズ（John Quincy Adams）はその少ないアメリカ人の一人であった。アダムズ大統領は、早くから、ハワイ王国をアメリカの力の圏内に入れるように、そして、ヨーロッパ諸国の権力から遠ざけるよう、強力に主張して

いた。しかし、同時に、アダムズ大統領は交易を拒否し、鎖国という国の権利には反対だった。また、恥ずべきアヘン戦争で、支那と争っている英国を支持していた。これらのことから推論してみると、日本に対するアダムズ大統領の攻撃的な態度は、後に述べるように、「日本の港を開港に持つていくことは、キリスト教を信じる国々の義務、というよりは権利でさえある。全体の福利のために、私的な権利を引っ込めるべき、だということを日本は知るべきである」というのがアダムズ大統領の主張にあった。

1846年までには、多くのアメリカ人は、アダムズ大統領と同じ考えを持つようになっていた。太平洋の中での強烈な若い力を持った国として「当然の宿命——manifest destiny」をもった国民として、多くのアメリカ人は、みなぎり亘る若い力を基にした文明を、西へ、西へと拡大するという熱情的な信念に燃えていた。(その信念は熱情的なプロテスタントの教化運動の復活とぴったり一致していた)新太平洋国家として、アメリカの政治家たちの日本との関係は、アメリカの英、仏にたいする競争意識として、アメリカでは地球的規模の中で、意識されていた。アメリカのビジネスマンにとって、日本は想像上の富のカタマリと映っていた。(宣教師たちにとっては、日本は殉教の可能性のある地としてのみ、永年考えられていたが)今や日本は、宣教師たちにとっては、聖杯にも等しい、いつかは改宗する閉ざされた神秘的な帝国となった。

日本との結び目としてのラハイナ

ラハイナに赴任して4年後にドワイト・ボールドウィン博士は、難破してラハイナに漂流した数人の日本人を発見した。1840年8月1日付けの「ザ・ポリネシアン紙」にボールドウィン博士は「これらの日本人は、アメリカの捕鯨船“ジェームズ・ローパー号”に救助された」と報告している。10人乗りのジャンク船“長者丸”は日本沿岸の貿易に従事していたが、激しい嵐に見舞われ、太平洋の真ん中まで押し流されたのだった。方向感覚を失い、あてどもなく漂っていた。乗組員のうちの3人は、何ヶ月もの間に、飢えと病気で次々と死亡していた。生存者と船に残っていた備品を救助したのち、アメリカ人船長は、船に火を付け、ジャンク船を燃やした。そして、生存者をハワイに連れてきたが、ハワイで、もう一人のジャンク船の日本人船員が死亡した。ボールドウィン博士は「私はいままで一人の日本人も見ることがなかった。ほとんどの人は、おそらく日本人を見たことがなかっただろう。この日本人たちは、多くのハワイの人々の興味を引かないはずはなかった。われわれはこの日本人たちがどんな事情で漂流に至ったのか知りたかった。そして、世界の、日本以外のほとんどすべての国の人々から、事実上、遮断されていたこの国のことを知りたかった」と報じている。